The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ディルタイの美学・文芸論における人間本性の心理学的分析
Author(s)	入江, 祐加
Citation	メタフュシカ. 2018, 49, p. 141-152
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71250
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ディルタイの美学・文芸論における人間本性の心理学的分析

入江祐加

序

一般に学は大きく二つに分けられる。自然科学と精神科学である。自然科学とは、物理学、化学など自然現象を対象として取り扱い、仮説を立て、推論し、実験的または理論的に検証する学である。自然科学に対して、ディルタイが基礎づけようとしたのは「精神科学」である。「精神科学」は、日本の学問区分では人文科学と社会科学の双方を含む。精神科学の認識のあり方は自然科学の認識のあり方とは大きく異なる。自然科学は自然現象を抽象化して取り出し、その方法を検証可能なものにすることを目指す。それに対して精神科学の場合には、何よりもまず、果てしなく広がっていく歴史的社会的現実を精神的な生動性に翻訳し直す。それゆえ自然科学では抽象化されるが、反対に精神科学では一種の転移によって、完全な生動性の全体へと翻訳し直される。自然科学では個性化の代わりに仮説的な説明根拠が探求され、精神科学では生動性において現象が経験される。精神科学において人間の心理学や人間が産出してきた心的生の表現における大きな連関の研究によってしか、発展や形態形成の法則や合規則性は客観的に捉えられないとディルタイは述べる。

ディルタイは精神科学の構築において、歴史と社会を構成している人間の生動的な体験を記述し分析するために記述的分析的心理学の研究を独自に展開する。彼は人間に関する記述や分析において、歴史と社会を構成している人間の生動的な体験を捉え、人間が人間自身の自己理解を深める過程を根拠づける。こうした観点からディルタイは、人間の精神的生や歴史を理解するために詩や芸術作品の存在に計り知れない意義を認める。人間が人間を理解するための手掛かりは、ソロンの詩句のうちに、ストア哲学者の自己省察や、聖者たちの瞑想や、近世の人生哲学のうちにあるとディルタイは言う。この自己省察のみが、過ぎ去ったものの血の気のない影に、第二の生を与えることを可能にする。ディルタイによると、詩や芸術作品は感覚的な経験や個人の認識を開示しているだけではなく、社会や時代において人間自身の生のあり方を客観化し、精神科学において生そのものの合目的的な連関を構成することに関わっている。それぞれの作品の内容や登場人物は、いつもなにかしら類型的なものを備え、つねに作家の家族とその時代に属するとディ

ルタイは言う。本稿は、文化のそれぞれの体系のなかで自らを現しながら人間が産出してきた心的生の表現が、いかにして同型的なものとして人間本性の同一性と結びつき、それらが人間の本質とどのように結合するのかということを考察する。そして、芸術作品の解釈・追体験を通して、生が自らのなかからひとつの世界観を開示するという目標に近づいていくことを明らかにする。

最初に大まかな見通しを立てておく。第一節では、ディルタイの「心理学」を分析する。彼は「心理学」という学問に従来の研究ではみられなかったような大きな役割を担わせる。彼は『記述的分析的心理学についての理念』のなかで、心の働き一般にかかわる一般原理や法則を研究することを目指したが、その後『比較心理学について――個性の研究』を執筆し、そこにおいて個人間の差異、そのニュアンス、類似を学問的に取り扱おうとする。第一節では、ディルタイがいかにして記述的分析的心理学から比較心理学に移行したのかを分析し、そこにおいて他人の表現や作用からその人の内的な状態や過程を追体験することにいかなる意味が求められるのかを明らかにする。第二節では、第一節で考察したディルタイの比較心理学をふまえたうえで、そこでいかにしてそれぞれの人間の内的経験が表現され、いかにしてそれらが組み合わされていくかを具体的にみていく。ディルタイの『体験と創作』のレッシング論を例として、詩人や芸術家の表す登場人物や作品の内容は、その時代や社会を明らかにするためのひとつの見本であることを分析する。そして彼らの生み出すあらすじと劇行為と登場人物によって、ひとつの時代や社会が対象化されることを明らかにする。第三節では、詩や芸術作品が時代や社会を表すためのひとつの見本であることをふまえたうえで、それらがいかにして個性化へと通ずる内的連関の追体験に還元されるかを明らかにする。彼らが描く登場人物や劇行為やあらすじは世界のなかである位置を占めるものとして存在する。詩や芸術作品がいかに時代や社会における人間の意識の客観性へと高められていくかを分析し、それらがいかに現実を解釈し解明していくための視点を用意するかを考察する。本稿は、ディルタイ中期の比較心理学および美学論を主にとりあげるが、それをふまえたうえで人間の心的生の表現が同型的なものとして人間本性の同一性と結びついていく過程を後期の歴史論と関連させて論じる。そうすることで、人間自らの体験の表現がそれ自身の自己省察を通して、創造的に生を捉える過程を根拠づけたい。

第一節：記述的分析的心理学から比較心理学へ

ディルタイは歴史・社会のあり方を一つの包括的な学問「精神科学」として規定しようとした。彼は自らのこの試みを「歴史的理性批判（die Kritik der historischen Vernunft）」と呼ぶ。この言葉はディルタイにおいて、カントを踏襲すると同時に、越えていこうとする意志を示している。カントは経験的立場からではなく、アプリオリな認識の可能性を説明する超越論の立場に立った。これに対してディルタイは、精神科学を経験的立場から吟味しようとする。ここには精神科学という学問独自の性格が存している。

精神科学の研究の対象は「個人、家族、構成されたさまざまな団体、国民、時代、歴史的運動、あるいは歴史的発展の連続、社会的組織体、文化の体系や、それら以外の人間の全体からの断片であり、最後にこの人間そのもの」（GS Ⅶ, S.85）である。自然は人間にとって疎遠であり、把

握する主体を超越している。出来事の担い手、何かあるもの、事実、実体などといった表現はそれぞれ、もっぱら認識を超越した論理的主語を言い表しており、そうした主語について、合法則的関係、数学的関係、力学的関係などが述語になる（vgl. GS Ⅶ, S.90）。それに対して、精神科学の構成は、「生を生そのものから理解する」（GSV, S.4）という言葉で表される。これは生の概念が考察の主体でありかつ客体でもあるという二重の在り方で認識に入り込んでいるということを意味している。

精神科学は人間そのものの理解を獲得することを目指す。それは自らが何であるかについての理解を人間自身にもたらす。精神科学の認識論は、人間自身の「自己省察（Selbstbesinnung）」から見出されるとディルタイは言う。そこから、ディルタイは彼独自の「心理学」を構築する。彼は心理学という学問に従来の研究ではみられなかったような大きな役割を担わせる。ディルタイにおいて心理学は感覚的経験や意識の認識だけではなく、それらと結びついて、歴史と社会を構成している人間の生動的な体験を記述し、分析するものでなければならなかった。

> 偉大な作家や詩人たちの作品において従来の心理学よりも豊かに含まれているものを、記述の網のなかにとらえ込もうとするような、そうした心理学が求められている。それはアウグスティヌス、パスカル、あるいはリヒテンベルクが、一面的であるけれども、透徹した照明によってすこぶる迫真的なかたちで構築した思想を、普遍妥当的な連関においてはじめて人間的知識に役立てようとする、そうした心理学である。そして、記述的分析的心理学のみが、この課題に向かって前進していくことができる。（GS Ⅴ, S.153）

記述的分析的心理学は、当時流布していた心理学、すなわち社会から抽象された人間を観察対象として、仮説や実験などの自然科学的方法で考察する心理学とは異なる。人間の生の全体的連関についての直観的な理解を与えるとされる文学作品や芸術をもディルタイは心理学に取り込み、心理学もまた、一般化しつつ抽象化しつつ、作家や詩人たちが生について論じる方法に近づいていかなければならないとする。記述的分析的心理学は「心理学」といいながら、捉えがたい精神科学の連関を明らかにする要求から語られたものであり、人間に関する記述や分析において自己理解を深めようとする人間学であった。

そして、記述的分析的心理学はちょうど樹の幹が枝へと伸び広がっていくように、比較心理学へと伸び広がっているとディルタイは言う（vgl. GS Ⅴ, S.241）。彼は、『記述的分析的心理学についての理念』のなかで、心の働き一般にかかわる一般原理や法則を研究した。そこにおいては心的生の同型性が主題とされ、もっぱら記述し分析しようとしているのは、あらゆる個人において同種的な心的構成要素、またあらゆる個人に同型的な心的生のプロセスであった。そこでは、普通の人間なら誰にも認められるような連関が捉えられるが、それゆえに個人間の差異は背景に押しやられる。『記述的分析的心理学についての理念』の執筆のあと、ディルタイは『比較心理学について――個性の研究』を執筆し、そこにおいて個人間の差異、そのニュアンス、類似を学問的に取り扱おうとする。実際、記述し分析する方法は比較する方法に連なっているとディルタ

イは言う。それぞれの個人において、男性と女性、種族、国民性、風土の特殊性、生まれつきの気性の相違などの差異、また詩人を宗教者から、学者を実践的な生活者から、ペリクレス時代のギリシア人をルネサンスのイタリア人から分かつようなありとあらゆる差異が存在する。ディルタイにとって「理解」という言葉は、「まったく性質を異にする他人の表現や作用から、その人の内的な状態や過程を彼に属する内的なものとして追体験する」（GS Ⅶ, S.259）ことであった。

比較心理学において、つねに自己は状況に取り巻かれて存在するとディルタイは述べる。比較心理学において自己は、他者の生の経過を把握することによって、人間的基盤と自己が編み込まれている歴史的関係を意識するようになる。確かにひとりの人間の内的経験は、対象の表象の手前にとどまったままであり、対象の表象をいまだ自己自らの意識連関に組み込んでいない。精神的事実の地平のそうした拡大は反省によってもたらされるとディルタイは言う。この反省が内的経験の類似物を形成する。あらゆる精神的事実は、原初的には内的経験の追体験によって現に存在する。このようにして、精神科学というこの領域の根本的な共通特性が生じてくるとディルタイは言う。ディルタイによれば、ある人間の自己自身についての省察が理解の照準点であり基盤であり続ける。

第二節：時代や社会を表すためのひとつの見本としての登場人物

ディルタイの心理学において、その心理学が記述し、分析し、比較しようとしている人間は、つねに社会や時代との関係のもとに存在している。さまざまな連関を捉えることから、人間は人間そのものを洞察し、評価し、理解するという課題に近づく。こうした観点から、ディルタイは詩人や芸術家の仕事の意義を分析する。ディルタイによると、詩や芸術作品において、個々の特別な人間の感情や状況を描写する過程そのもののなかで見出された理念や象徴は、ひとつの時代や社会を対象化することに関与し、現実のなかで自身のあり方を捉えようとする人間そのもののプロセスに影響を及ぼす。たとえば『体験と創作』のなかのレッシング論において、ディルタイは以下のことを考察する。レッシングの戯曲に描写されている登場人物のあらゆる会話、出来事、状況の具体性は、その時代の社会状況とその社会的組織の内容を明らかにさせることに関係する。レッシングの作品の『ミンナ・フォン・バルンヘルム』において、主人公のテルハイムは、フリードリヒ大王の軍隊に属しており、この軍隊に所属しているものとして、最高の価値基準に基づき行動する名誉をもっている。テルハイムや従卒のユストの役柄は、フランス人のいかさま師や少佐とは対照的な人物像によって際立たされる。彼の婚約者であるミンナは、侍女と朝食をとりながらおしゃべりをしたり、不平を言ったり、テルハイムと愉快なやりとりを行う。この劇をディルタイは以下のように叙述する。

> 時代と生活環境の一層確実な表現形式から劇行為は真実らしくなる。その形式は、この二人の人間の内面的関係に、ある距離を与え、それが二人の誤解を明らかにする。名誉を傷つけられた少佐は、自分が彼女にふさわしくないという理由でこの婚約者の前から姿を隠すが、探し出される。けなげな女性の愛と論証とが恋人の高潔な心根にこだまし、今度は少佐

の側が婚約者が零落していると錯覚して完全に我にかえり、自分の愛を心おきなく告白する。彼の人間性が名誉を傷つけられたという気持ちに打ち勝つ。（GS ＸＸⅥ, S.47f.）

テルハイムはドイツ喜劇のもっとも見事な性格を有しているとディルタイは述べる（vgl. ＸＸⅥ, S.46）。「彼は、真正な詩人の作品だけにある、生活状況が変化するたびにまったく新しい局面によって人を驚かせる精神生活の、あの自由な機敏さを備えている。あるときはモリエールの『人間嫌い』に近くメランコリックに思い悩むかと思えば、また厳格な堅物となるのは、まさにフリードリヒ大王指揮下の将校の典型である」（ebd.）。クールラントの貴族は、啓かれた偉大な王に魅了されたからこそ仕えたのであり、祖国愛という大きな動機もなく、自分が仕えて王の名誉を毀損したという苦悩が激しく彼の心のうちに燃えあがる。劇の最後に、ミンナの一計が成功し、テルハイムは突然婚約者への義務を強く感じ、反対に名誉を汚されたという意識は後退する。内面の自尊心が他人に対する一切の敬意よりも重んじられる。『ミンナ・フォン・バルンヘルム』は、ドイツ劇ではじめて個人の内面の葛藤と社会・他人に対する束縛と服従、対立を描き模範となる。この劇の充実感や満足感や尽くせぬ快感は脇役からも表現されており、これらの人物の個性的表現が際立つのは、あらゆる出来事、状況、時代と生活環境の一層確実な表現形式から劇行為が真実らしくなるゆえである。そして、テルハイムやミンナのあらゆる会話、出来事、状況の具体性が規定されることにおいて、その時代や社会の葛藤、理念的対立が明らかになる。

また同じくレッシングの『エミーリア・ガロッティ』という戯曲において悲劇の構成は、それが生まれた啓蒙主義社会の時代状況によって制約を受けている。しかし、なんといっても悲劇の形式はいつも詩人が制作している時代の精神的傾向に左右される。この劇は宮廷、君主やその佞臣たちと、自由、慣習や独立した生活を主張する自立した人々との対立の上に成立している。悲劇は権力をもたないこれら臣下の専制政治に対する無力に原因がある。臣下たちはしくまれた罠にはまり、いわば首を締められ、絶望が場面ごとに露わになる。それとともに彼らの政治的状況のみじめさも現れる。ディルタイによると、エミーリアは純粋で、それゆえに最後の場面では、将来を意識せずに英雄のように気持ちが高ぶっているものとして描かれている。この瞬間の確固たる決断として、レッシングの厳格な知性はエミーリアに公爵の掌中に留まるよりも、むしろナイフを取るように仕向ける（vgl. GS ＸＸⅥ, S.54）。レッシングが先導した啓蒙主義の考え方として、人間が生きる価値は、人間が個人として自律した気持ちをもって、どんな外部の運命にも負けない信念をもっているかということにあった。一方、時代や社会の状況は自由な考え方と対立しながら、既存の価値観を守りぬこうとしていた。『エミーリア・ガロッティ』が描かれた時代や社会において、啓蒙主義が個人に広まり、社会は道徳感情によって満たされていた。各々の登場人物の描写は、このような時代や社会の状況を反映して救いようのない絶望と結びついているとディルタイは述べる。

さらにディルタイはレッシングの最高傑作である『賢者ナータン』を詳しく叙述する。ディルタイによると、劇の究極的効果は、新しい共同体のために人間的共同体の団結を引き出す感動にある（vgl. GS ＸＸⅥ, S.89f.）。親密な人間本性の発見や親交、それから生じる至上の幸福。こう

して生まれる共同体は内面的なもので、世間の宗教や階級や活動となんら関係がない。レッシングはナータンに「ああ、おまえたちのなかに人間とよばれることに満足する者をもう一人見つけていたら」と叫ばせる（vgl. GS ＸＸⅥ, S.85）。偉大な真理によって心を広め、既成宗教を信仰する動機がなくても善を行う自由な人物たちを描くことによって、レッシングの劇にもっとも独自な特徴が『賢者ナータン』によってより高まるとディルタイは述べる。主人公ナータンの描写において、「われわれはみな主において追求する目的に従い、行為と運命をもつ一組織として他の人と結びつけられていて、その組織がわれわれの外面的世界を決定している」（GS ＸＸⅥ, S.90）ことが明らかになる。世間の宗教や階級や活動を越え、志を同じくするものの結束がいかにして果たされるかを、啓蒙主義時代の人々の願いとして描写することで、レッシングの創作はこれまでの劇になかった最高の生の形を表す。

劇中のいかなる登場人物も個性的である。人間が個人として自律した気持ちをもって、どんな外部の運命にも負けない信念をもって突き進む過程が描写されている。彼ら自身が自らの信念を乗り越えようとする過程や、さまざまな外的状況によって破滅していく過程そのものを共有することによって、諸々の行動形態の形式が不断に生まれてくる。彼の作品の登場人物の内面的な葛藤や劇行為の描写は、人々が時代や社会の全体を把握し、自らの行動形態を考察する契機を生み出す。時代や社会特有の理念的対立、問題を共有するにあたって、あらゆる詩や芸術作品の叙述は、自己の生の経過について、著作家が表現した自己省察の一形態に他ならない。

劇中人物は、大きな意味をもってその時代を代表する普遍的な感情を発露している。詩人や芸術家は作品のなかで自分自身の個人的な体験を描写するが、彼らはさまざまな特徴を強調し、生そのものを強いタッチで描き出す。こうして、彼らが叙述した経験がひとつの生の経験として追体験される。ひとつの類型的な生の表出はそのクラス全体を代表している（vgl. GS Ⅴ, S.279）。そこで、グループ全体の規則的なものが表現され、共通のものが際立たされ、それによって生が理解される。ディルタイによれば、シェイクスピアのもっとも活発な劇中人物でさえ、情熱の展開に適した心のなかで情熱が推移していくことの見本（Präparate）[1]にすぎない（vgl. GS Ⅵ, S.224）。すなわち詩人や芸術家は、自らの内面の状態を通じて外部のイメージに生命を与え、対象を精神化する。芸術作品の核としての観念性はまさに、感動する内面の状態を外部のイメージによって象徴化する（Symbolisierung）ことにあり、また、芸術家が自らの内面をのぞき込み、その内面の状態によって外部の現実に生命を与えることにある（vgl.GS Ⅵ , S.100）。例えば、画家があるモデルを使って聖母の絵を創り出そうとするとき、画家が聖母について抱いているイメージに合わないモデルの特徴は排除される。また他の画家は、ある対象を描くとき肉体をほっそりとしたものに描いてしまう場合がある。そのとき画家は肉体を、特定の画材の諸条件にあてはめながら知覚している。彼らは自らの状態を外部のイメージを通じて解釈し、感覚的に知覚する。またレッ

[1] ドイツ語の Präparat という言葉は英語に訳すと、準備されたものを示す preparation とひとつのグループやクラスから取り出された代表的なもの・典型的なもの・適例・見本を意味する specimen の両方の意味がある。（他に生物学用語である顕微鏡の載物ガラス・スライドを意味する slide や化学用語で混合物・合成物を意味する compound という意味もある）。https://en.langenscheidt.com/german-english/praeparat 参照。

シングなどの戯曲において、劇中人物の本質的なもの、類型的なものは明るく照らされていて、他のすべてはたそがれのなかに次第に消えていくように見える。彼らもまた、関心や注意を引くものや、それらに条件づけられて強調された知覚に現れるものを提示するだけである。そして、まさしくそれによって彼らは現実そのものに対する見方に挑戦してくる。すべてを見せることに熱心な劇作家は、幻想を作り出さない。現実の作用は、生それ自体におけるように、登場人物の核心のなかになにか不可解なものが残っているときにさらに強められる。もし劇作家が実際の会話を写しとろうとして、その会話に付随しているようなあらゆる偶然的なもの、不正確なもの、くだらないもの、間延びしたものなどもいっしょに写しとってしまえば、おそらく彼は読者を退屈させることになる。そのような劇作家は、独創的な凝縮や浮き彫りの作用から取り残されている。凝縮や浮き彫りの作用は、会話における偶然的なもの、衝動的なもの、沈んでいるものを、われわれ自身のなかで高めると同時に単純化する。

> 想像力は、それ自体は生命をもたない出来事のつながりから、一人の人物を作り出す。人物形成は、感情のなかにあるきわめて強い関心を思いきり強調したところに、本質的な特徴が結晶することによってなされ、他の特徴はたそがれのなかに消えてしまう。こうして現実全体の詩的仮象が生まれる。（GS Ⅵ, S.223）

内的生動性を人物や出来事に分与するという働きによって、戯曲や物語文学に登場するそれぞれの人物は、およそ一定の機能を与えられ、他の人物と境界づけられ、作者の血のいくらかを付与される。それぞれの人物は、いつもなにかしら類型的なものを備え、つねに作家の家族とその時代に属することになる（vgl. GS Ⅴ, S.222f.）。ディルタイはシェイクスピアの『ハムレット』の言葉を次のように引用する。

> 「芝居の目指すところは、昔も今も自然に対して、いわば鏡を向けて、正しいものは正しい姿に、おろかなものはおろかな姿のままに映しだして、生きた時代の本質をありのままに示すことなのだ。」（GS Ⅵ, S.231）

ディルタイは詩的作品を「時代の鏡」と呼ぶ（vgl. GS Ⅵ, S.230）。「もしも普遍妥当的な世界理解を得ることが認識の力と世界に対する認識の態度のなかにあるとしたら、この認識は、不完全な鏡や完全な鏡のなかに幾千にも映し出されるように、詩人の作品のなかに反映されるであろう」（GS Ⅵ, S.232）とディルタイは述べる。レッシングやゲーテやシラーの想像的な描写の力によって、劇曲のなかに表される登場人物の性格描写や葛藤は、その時代の人間の全体のなかに位置づけられている。彼らによる想像力の補完によって、実際には実在しないハムレットのような人物が、人間の類型・典型を表すものとして現れる。

第三節：普遍的で人間的なものから、個性化へと通ずる内的連関の追体験へ

詩人や芸術家の生み出すあらすじと劇行為と登場人物の表現によって、ひとつの時代や社会が対象化されるとディルタイは言う。根源的な多様性、さまざまな構成要素、それらの個々の諸関係から、ひとりの天才の功績によってはじめて、ひとつの時代精神と呼んでいる統一性が作り上げられる。詩人や著作家が描く登場人物は劇のなかでのみ存在する孤立した存在ではなく、社会や歴史、自然の生の感情を含みもっている複合体である。彼らはそれぞれの社会や歴史と関係して捉えられるという点で、すでに人間の意識の具体化である。

> 人間はどこまでも歴史的であって、彼の思考だけでなく、彼の生それ自体がその最深部にいたるまで、文芸・歴史記述・人間についての思考という雰囲気において呼吸し、成長し、形成されるのである。われわれは生を反省することなしに、生を知ることはない。それでも文芸は、自然を把握するための器官であり、人間を理解するための器官であり、我々が愛情に生き、結婚生活を送り、友人たちと生活するさいに、その仕方を教えてくれる器官である。（GS Ⅴ, S.275）

感覚組織の並外れた力をもち、その感覚的な有機的体質から生ずる美しい仮象を克服しがたい現実から分離する芸術家や詩人は健全で完全な人間であるとディルタイは言う（vgl. GS Ⅵ, S.94）。ゲーテによると、「言い方はどうであれ、詩人やそもそもすべての芸術家は天性のものに違いないということが、一層はっきりと理解される。つまり、内的で生産的な力が、記憶の中にとどめられている幻像を自由に、意図や意志とは無関係に生き生きとした形で取り出すに違いない。それらの幻像は自己自身から展開していかざるをえない」（GS Ⅵ, S.100）[2]。こうして、偉大な詩人や芸術家における天才が登場したことにおいて自然は、人間に対して実験を行ってみせたということができる。自然はここにおいて、普通であれば簡単に見過ごされたままであった生の法則を人間に認識させている。

偉大な詩人や芸術家における天才が登場したことにおいて、人間は現代史とともに、遥かなる国における出来事とともに、あるいは身近な人間の心のなかで進行しているものとともに前進するとディルタイは言う。彼らの存在は自然によるひとつの実験であり、それにより他の人間は、自分の限定された実際の生活では存在しない可能性の幅広い領域を獲得することができる。確かに、ひとりの詩人や芸術家の体験は個人的なものにすぎない。しかし、彼らの創り出したものは象徴的なものになる。その原形式は具象的なるものであるが、内的な過程をある状況において表し、生を喩えている。作品はひとつの本質を代現し、世界のなかである位置を占めるものとして人間の生の連関に組み込まれる。そこに表現される視点は世界全体を解釈し解明していくために用意される見本であり、その解釈や追体験によって人間ははじめて自己自身を知るようになる。

---

[2] ボヘミアの解剖学者ヤン・エヴァンゲリスタ・プルキニェの著作『主観的な意味での見ること（Über das Sehen in subjektiver Hinsicht）』についてのゲーテの書評（1824 年）からの引用。Vgl. Goehtes sämmtliche Werke in vierzig Bänden. Bd. 14, Cotta, 1840, S.412.

類型によって人間が人間自身についてもつ意識が共有されると同時に、それが実在をもったものとして現れる。

「個人相互のあいだに成立している共同性が感覚世界のなかで客観化（objektivieren）された多様な形式」（GS Ⅶ, S.208）をディルタイは「客観的精神」と呼ぶ。人間とは何であるかという問いは、個人の内省や想起から見出されるのではなく、人間が自らの生の状態を表現し、それを他者や社会のあいだで価値あるものとして固定化させることによってはじめて見出される。人間のさまざまな行為、固定された生の諸表出、また他人に対するこれらの表出の影響だけが、人間に自己自身を教える。人間は、理解のなかでの回り道（Umweg）を通してはじめて自己自身を知るようになるとディルタイは言う（vgl. GS Ⅶ, S.86f.）。詩や芸術作品の類型から取り出される普遍的な人間像を理解することと並行して、それを通して、人間は自らの現実、外的世界、心自身の深みに深く入っていく。

> しかもこの客観的精神は、人類から始まってきわめて狭い範囲の諸類型にまで及ぶ分節をそれ自体のなかに含んでいる。この分節すなわち個体化の原理が客観的精神のなかで働いている。ところで普遍的で人間的なものの地盤の上に、またこのものの媒介によって、個性的な事柄が理解され把握されるようになれば、普遍的で人間的なものから、その個性化へと通ずる内的連関の追体験が生じる。（GS Ⅶ, S.151）

人間は自らの生の諸表出を通して人間の意識を構築し、普遍人間的なものを基盤にしながら、自らの生の相貌を生き生きとした姿で取り出す。例えばディルタイはルターの例を出して具体的に説明する。ルターの書簡や著作、彼の同時代人たちの報告、宗教的討論や公会議および彼の公務上の通信の文書が閲覧される。そこには大層爆発的な力、生死が問題であるようなエネルギーがあるゆえに、現代の人間にとってまったく体験できないような宗教的過程を体験することができる。けれども、この過程を追体験し、さまざまな状況に身を置いてみると、すべてのものが、それらの状況のなかで、宗教的な感情生活の特別な展開へ突き進むことが理解される。ルターがこの運動の先頭に立って歩むとき、一般的に人間的なものから宗教的な領域へ、そしてここから、その宗教的領域の歴史的背景を通して彼の個性に及ぶ連関にもとづいて、彼の発展を体験することができる。この宗教体験が現代の人間の地平を拡大して、このようにしてのみ現代の人間に知られうる人間生活の可能性が示される（vgl. GS Ⅶ, S.215f.）。ルターの書簡や著作は、人間の信仰の典型・類型を表す。それと同時に、その典型的な信仰の具体例を通して、現代の人間の信仰生活も変容する可能性がある。そこに表される普遍人間的なものから、現代の人間の身近な生活や個性的なものの相貌が再認される。その読解は単なる一回的、特殊的なものに尽きるものではなく、その「追形成」、「追体験」によって読者は自らの現実に深く入り込むことができる。

歴史上、無数の偉大な詩や芸術作品が生まれ、無数の偉大さが観衆や聴衆によってすっかり追体験され、経験されうるものとなった。無数の偉大な詩や芸術作品が生まれ、その必然的な存在が万人のために存在する。詩や芸術作品の理解は、自分の限定された実際の生活では存在しない

可能性の幅広い領域を個人に開いてくれる。類型は、人間に人間が何であるかということを理解させ、人間共通の世界観を形作る。それと同時に、その普遍的で人間的なものの内容を追体験することにおいて、人間は自らの生の相貌を生き生きとしたものとして再認する[3]。それぞれの個々の体験が完全なものになるには、普遍的で人間的なものの理解が必要になる一方で、またこの普遍的で人間的なものの理解は、個々の生の生き生きとした生の把握に関わっている。ここでは、すべてのことは全体と個の相互関係によって規定されている。

精神的なものを基礎づけるという課題は、個人の心の内部から取り出されるだけでなく、社会的な連帯の意識に導かれて、たえず空間的に広がっていく。個々人の意識は社会生活のなかで人間そのものの合規則性へと作り変えられる。そして、人間の普遍妥当性が個々の相対的なものと作用し合うことによって、人間の実在が開示されていく。作品の鑑賞を通して人間は自らを振り返り（sich besinnen）、その体験を通して自らの生き生きとした生の相貌を理解し、形成する。人間の理解は、普遍的な人間像を理解することと並行して、それを通して、自らの現実、外的世界、心自身の深みに深く入りこむ。そうすることのなかから、理解は人間自身を制約するような価値段階を産み出していく。

歴史的社会的な過程はすべて実験では近づきえない。自然科学においては、帰納法・実験・数学的理論などの方法が優位を占めているが、精神科学では、記述・分析・比較などの方法が優位を占めているとディルタイは言う。さらに精神科学では、記述・分析・比較などの方法に固有の方法が付け加わる。この固有の方法は、自らの自己を外的なものに移入することに基づいており、また理解の過程において、自己移入と結びついて自己が変容することに基づいている。ディルタイの比較心理学の構築において、それぞれの内的連関が少しずつ捉えられ、その内的経験が組み合わされていく。ひとつの理解は、把握された特性によって、さらに理解されうる新しいものへと進むとディルタイは考える。この内的関係は、追生産、追体験の可能性のなかに与えられる（vgl. GS Ⅶ, S.234）。体験された状態はつねに、たとえどれほど不分明なものであろうと、人間の全体的な生の連関へ関係づけられ、そこからそれぞれの人間の内部に位置づけられるとディルタイは言う。

結語

ディルタイが行おうとした精神科学の基礎づけは、一言で言えば、生を生それ自身から捉えようとする試みであった。詩人・芸術家は、時代や社会特有の理念的対立、問題を共有するにあたって、自己の生の経過について、自らの自己省察の一形態を表現する。作品の登場人物やあらすじは現実のなかで協働するさまざまな生の構造を代現している。それは洗練されたやり方によって生み出される命題、価値の規定、そして目的を代現している。劇中のあらゆる個々の人物の描写

---

[3] 丸山は、これを「特殊の普遍化」、「普遍の特殊化」と呼び、その二つの運動が循環することによって、経験が明確に規定されていくことになると述べる。すなわち類型において、それが「何であるか」が理解される（普遍化）とともに、それが「どのようであるか」が理解される（特殊化）と丸山は述べる。丸山高司「『類型』について」，『ディルタイ研究』，1999 年，第 11 号，18-20 頁参照 .

と理解、その同種性と同型性によって、人間共通の世界観が形成される。生についての明察は、芸術につねに備わっており、現実を描写する芸術の段階と領域に応じて、人間もまた発展している。

中期の『体験と創作』およびその他の美学・文芸論において、ドイツの作家や詩人の仕事から、変転する人間の生におけるひとつの普遍的精神の結びつきを分析したディルタイの仕事は、最晩年の『精神科学における歴史的世界の構築』における歴史考察に影響を与えた。ディルタイによると、生は、生動性と同時に法則、合理性、恣意を示し、つねに新たな側面を現わし、個々の場合には明らかなことがあるかもしれないが、全体としてはまったく謎である（vgl. GS Ⅷ, S.80）。それをふまえたうえでディルタイは、生涯を通して相対的に移り変わる人間の歴史的過程のなかにも、ひとつの摂理が見出せるのでないかというオプティミスティックな態度を保持し続ける。ディルタイは中期の美学・文芸論において偉大な詩人や芸術家の仕事の内実を考察し、彼らの仕事の内実を考察することから人間自らが自己の本性の省察することの意義を問う。中期の考察は、ディルタイ自身の生涯を通した精神科学の基礎づけの試みにおいて、一貫した態度を呼び起こす。それは、社会や歴史のなかに埋没している人間自身を客観的に捉えようとする態度であり、生そのもののなかにひとつの目的を探し出す態度でもある。最晩年の『精神科学における歴史的世界の構築』のなかで、ディルタイは「作用連関」の概念を深化させたうえで、ヨーロッパの歴史を実証的に記述する一方、歴史的世界を諸目的によって充たされた世界とみて、歴史の進行にひとつの意味を与えることを試みる。このような歴史のなかで変化していく人間の過程のなかにひとつの目的を見出そうする後期の体系的な立場は、中期の心理学･美学の考察を通して徐々に確立されていったと考えられる。

（いりえゆか　現代思想文化学・博士後期課程）

参考文献

Bollnow, O-F. *Dilthey, Eine Einführung in seine Philosophie*, Teuber, Leipzig1936. 4th edition, Novalis, Schaffhausen, 1980.

Dilthey, W. / Yorck von Wartenburg, P. *Briefwechsel zwischen Wilhelm Dilthey und dem Grafen Paul Yorck von Wartenburg, 1877-1897*, New York: Georg Olms, 1974.

Makkreel, R-A. *Dilthey, Philosopher of the Human Studies*, Princeton University Press, Princeton, New Jersey, 1975.

折橋康雄「ディルタイ解釈学における個体性と普遍性――中期の類型概念をめぐって」，1996 年，第 31 号，24-34 頁 .

関雅美『歴史主義の擁護』，勁草書房，1983 年 .

丸山高司『人間科学の方法論争』，勁草書房，1985 年 .

丸山高司「『類型』について」，『ディルタイ研究』，1999 年，第 11 号，14-30 頁 .

安酸敏眞『レッシングとドイツ啓蒙』，創文社，1999 年 .

Die psychologische Zergliederung der menschlichen Natur in der Ästhetik und der Poetik von Dilthey

Yuka Irie

In meinem Aufsatz wird die Auffassung Diltheys thematisiert, dass Ausdrücke einzelner Erlebnisse von Dichtern und Schriftstellern sich auf einen zweckmäßigen Zusammenhang in der Gesellschaft und der Geschichte beziehen und dass die menschliche Individuation in jeder Dichtung sich in allgemeine Punkte gliedert. Dilthey findet durch die Ausdrücke der einzelnen Erlebnisse das Allgemeingültige und das über das Einzelleben Hinausgreifende im Willen. Die Erkenntnisse von Dichtern und Schriftstellern enthalten nicht nur sinnliche Erfahrung oder einzelne Erkenntnisse, sondern auch das Verständnis vom Menschen selbst, d. h. dasjenige, was die Geschichte und die Gesellschaft ausmacht. Der Mensch ist auf diese Weise durch und durch geschichtlich, da nicht nur sein Denken, sondern sein Leben selbst nach seinen tiefsten Bezügen nur in dieser Atmosphäre von Poesie, Geschichtschreibung und Denken über Menschliches atmet, wächst und sich gestalten kann. So sei die Poesie der Meinung Diltheys nach das Organ der Auffassung der Natur, des Verständnisses der Menschen, also Ausdruck der Art und Weise wie wir unser Leben führen.

Die vergleichende Psychologie versucht durch Ausdrücke der einzelnen Erlebnisse von Dichtern und Schriftstellern das individuelle Seelenleben eines Menschen zu reflektieren. Diltheys Meinung nach verhält sie sich zu den einzelnen Geisteswissenschaften als deren Grundwissenschaft. Gedichte und Dichtungen seien Präparate des Menschen, um sein Selbst, den menschlichen Willen, Gefühle und Vorstellungen zu verstehen. Dadurch würden sie mit anderen verglichen und überschritten ihr Inneres selbst. Wie in der Dichtung die Wahrnehmungen, die Gedanken und die Willenshandlungen ineinandergreifen, darin sei innere Zweckmäßigkeit gegeben. Beschreibend, analysierend und vergleichend eröffnet und begründet die Dichtung die Erkenntnis der menschlich-geschichtlichen Welt. Sie kann diese Funktion erfüllen, indem sie die Erklärungsprinzipien für die in dieser Welt bestehende Individuation entwickelt.

「キーワード」
ディルタイ、類型、追体験、比較、自己省察